

フィジー手話の地域差—ヴィティレヴ島の西部と東部の比較をとおして

佐野 文哉 (京都大学)

手話は国や地域によって異なる自然言語である。世界には、これまでに確認されているだけでも、119種類の異なる手話が存在するといわれている(亀井, 2006)。この手話にかんする研究は、1960年代のアメリカ手話の言語学的な「発見」に端を発しており、それ以降、主に北アメリカやヨーロッパを中心に行なわれてきた。そこでは西洋社会の手話が主な研究対象となっており、非西洋社会の手話にかんする研究は、近年徐々に数が増えてきているとはいえ、まだその数は少なく、とくにオセアニア島嶼部の手話についてはほとんど先行研究が存在しない。そこで本発表では、発表者が2013年から継続して現地調査を行なっているフィジーのろう者や手話の事例をとりあげ、その現状について説明する。

フィジーはオセアニアのメラネシア地域に浮かぶ島嶼国である。フィジーはいわゆる多民族・多言語国家であり、その民族構成は先住民であるフィジー人と移民であるインド人に大別され、公用語はそうした社会状況とイギリス統治の歴史を反映して、イギリス英語とフィジー語、そしてフィジー・ヒンディー語(ヒンディー語の地域変種)の3言語である。一方、フィジー手話(Fiji sign language)は、民族を問わず、フィジーのろう者によって用いられている手話である。その起源は、オーストラリアやニュージーランドのろう教育で用いられているオーストララジアン手指英語(Australasian signed English: 以下、ASE)であるが、現在のフィジー手話には、ASEとは異なる手話表現が多数みられ、その文法も英語のそれとは異なっている。ただし、一口にフィジー手話といっても、発表者が調査を行なったフィジー・ヴィティレヴ島のろう者をとりまく状況は島の東西で異なっており(cf. 佐野, 2016)、フィジー手話にもまた、そうした地域差を反映したさまざまな違いがみられる。今回はとくに、この地域差に焦点をあてて発表を行なう。

発表の前半では、フィジーのろう者コミュニティや手話をとりまく歴史的経緯や現状を簡単に整理する。発表の後半では、フィールドワークで収集したデータをもとに現在のフィジー手話にみられる地域差について説明し、前半で整理したフィジーのろう者や手話をめぐる歴史的経緯や社会状況と照らし合わせながら考察を行なう。

参考文献

亀井伸孝 (2006) アフリカのろう者と手話の歴史—A・J・フォスターの「王国」を訪ねて—明石書店

佐野文哉 (2016) カテゴリー化に抗する手話／カテゴリー化される手話—フィジーにおける手話がかたちづくる社会関係— 日本オセアニア学会ニューズレター114: 1-12